またもや三菱自動車の不正

政治の世界では、相変わらず政治家の不正や不祥事が続くが、日本を代表する大企業にも同じような「病気」が蔓延している。三菱自動車の燃費試験データの偽装問題は、大企業病を象徴するものだ。

写真は前にリポートした大阪市西区北掘江の土佐稲荷神社である。この地は三菱財閥、戦後の三菱グループの発祥の地だ。ここには「奉寄進」として、三菱金曜会のグループ企業の名が列をなして記されている。三菱自動車の名もあったと記憶する。

朝日新聞 4 月 29 日「天声人語」が三菱問題を取り上げているので、参考までに紹介しておきたい。

三菱自動車にかつて、「デボネア」という高級車があった。とても売れた車とは言えず巷ではあまりに見なかったが、三菱グループ会社のトップたちの社用車にはよく使われていた。旧財閥の仲間内で支え合う、そんな姿勢の象徴でもあった▼2000 年以降の三菱自動車は不祥事の連続だった。死傷事故を起こすほどの欠陥があっても隠す。車に問題があっても内密に修理する。信用を失い経営危機に陥ったが、グループに救われた▼04 年に、三菱の「御三家」といわれる銀行、商事、重工業が中心になってお金を出すと決め、人も送り込んだ。当時の新聞に「三菱の名のついた企業がつぶれるはずがない」という社内の声がある。その通りになった▼会社という入れ物は救ったが、体質は救えなかったようだ。今回明らかになった燃費の偽装では、実際に車を走らせず、机の上で計算してすませた例が相次いだという。鉛筆をなめる、とはこのことだ▼驚くのは、「不正」が 25 年にわたっていたことだ。不祥事対応に追われて、経営再建を進める最中にも続いていた。競争相手に負けない燃費の数字を作ることが何より優先されたのか▼横山源之助著『明治富豪史』で、草創期の三菱財閥の幹部が皮肉っぽく書かれている。ふだんは威張るのに、大旦那・岩崎弥太郎の前では「好い児におなり遊ばす」。そんな内向きの行動様式、今は引きずっていないだろうか。グループだから救う、救わないの論理では、消費者の視線にたえられない。

（2016年5月4日））